



椿椿山筆「渡邊崋山像」重要文化財 嘉永6年（1853）田原市博物館蔵

## 渡邊崋山

江戸時代後期の田原藩（現愛知県田原市）の藩士で画家としても活躍した渡邊崋山は、天保2年（1831）、妹・茂登（もと）の嫁ぎ先である桐生を訪れる。江戸の田原藩邸から桐生に向けて旅立った行脚の記録を、後に「毛武遊記（もうぶゆうき）」として記し、桐生人との交友や市内各地で描かれたスケッチとともに後世に伝えている。

寛政5年（1793）、江戸・麴町の田原藩邸で生まれた崋山は、藩の財政難により幼いころから貧しい生活を余儀なくされたが、そのような厳しい中にあっても勉学に励み、また得意だった絵の内職で生計を助け、20代半ばで画家として名前が売れるとようやく生活も安定させることができたという。画家としての崋山は、国宝「鷹見泉石像」をはじめ、緻密な描写と微妙な陰影による高い写実性を特徴とした傑作を数多く描いている。また、藩士としても天保3年（1832）には家老に就任、天保の大飢饉では崋山発案の備蓄庫「報民倉」により1人の餓死者も出さなかったなど政治家としても高い能力を示した。さらには儒学、農学、蘭学、兵学にも精通し、武士、画家、学者と幅広い分野で多彩な才能を発揮していた。

そんな崋山と桐生との繋がりとは、桐生織物販売のため江戸に出入りしていた買継商・岩本茂兵衛が妹の茂登と結ばれることから始まり、この縁が織物で栄える桐生に崋山を外向かせている。「毛武遊記」には、縁者や桐生人に囲まれ心休まるひと時を過ごしたことや、山紫水明に富む桐生界隈のスケッチが多数記される中、雷電山から桐生を一望した線画には、今と変わらない菱地区の山々や八王子丘陵の山の背が描かれ、崋山が確かにそこに立ったことを約200年の時を越えて伝えている。

天才的な先見性と広い視野を持った崋山は、蘭学を通じて西洋諸国の強大な発展を知り鎖国政策を続ける幕府の危険性を主張するが、西洋文化・学問の普及を恐れた幕府は蘭学者の弾圧「蚕社の獄」を開始。崋山も幕政批判の罪で蟄居の刑に処せられてしまう。藩主に災いが及ぶことを恐れた崋山は、天保12年（1841）に自ら命を絶ち49年の生涯に幕を下した。充実の桐生滞在が10年後のことであった。

ファッションタウン桐生推進協議会（山口正夫会長）は崋山と歩く会（岡田幸夫代表）と共催で、崋山来桐の記念碑を10月9日に雷電山展望台に設置する。織物が紡いだ幕末の天才と桐生の縁を、崋山来桐の地で未永く後世に伝えていく。

参考／『毛武遊記』に沿って崋山と歩く桐生と周辺の旅（崋山と歩く会）／田原市博物館  
「渡邊」は自刃する前に使用していた「渡邊」としています。

織物が紡いだ縁  
幕末の天才画家が残した足跡